

# カーナビにでる城谷の地名と城谷城について

番組宛に右記のメールを頂き、早速調べました。

ご指摘の近辺に城谷城という名の城が在るとは、私は聞いたことがなかったので色々調べたところ、一冊だけ城谷城の名が記載してある書籍を見つけました。「**上原散歩1992**」という60ページほどの薄い本で上原町民の郷土家の方が編纂した上原史といったもののようです。その中で、「**あまげ山**」とよばれる山はかつて**平戸松浦藩**の物見番所で「**城谷城**」というお城があったとも伝えられており、**井手平城攻防戦**の際は**後藤惟明**が城に入り守備軍として大いに活躍したとしてあります。

ここに出てくる「**あまげ山**」こそ「**中世山城分布調査報告書**」で報告されている「**金ヶ崎城**」の位置する山で、すなわち「**城谷城**」=「**金ヶ崎城**」ということになります。

この山は他にも、「雨乞山」や「城山」とも呼ばれ、山の北側の谷一帯の小字を**城谷**といいます。このようなことから土地の人々の中で「**城谷城**」と呼ぶ人がいるのでしょう。

ちなみに俵ヶ浦にも城ノ谷城と呼ばれる城跡があり、そこも小字を城ノ谷といいます。

市が発行している「**中世山城分布調査報告書**」では「**金ヶ崎城**」としてあることから、正式には「**金ヶ崎城**」と呼ぶのが正しいのかも知れません。しかしなぜ地名にも由来していない「**金ヶ崎城**」という名前なのか腑に落ちないところはありますが、城の名前は第一発見者によって付けられることが多く、先駆者である郷土史家の方が、何か想いがあって付けられた名前だと思われます。

## <カーナビで見られる城谷の文字>



## <上原周辺の小字>



井手平城から平戸の松浦隆信公に大村方が押し寄せてきたことを知らせる役割をした城があるというのを聞いたことがあります。

「**城谷城**」という城だったそうですが、私はどこにあったのかがわかりません。西九州道を通っているとカーナビに「**城谷**」という地名が出てくるから、そこにあったのかなあ？と思うんですが、定かではありません。もし、ご存知なら教えてくださいませf^\_^;)

うわばる Part 2参照

しるや

Part 3参照

かねがさき

## <参考書籍> 上原散歩1992 1992(平成4年)発行

### 城の谷城址天城山と竜王祠

国道35号線沿いのバス停、上原水源地入り口より約300米、北を望む地点に、標高120米余りの小高い山が聳えている、山の中腹は現在竹林生い繁り、その下には民家数戸が点在している。

そくに「あまげ」と呼ぶこの山は、昔、平戸松浦藩の物見番所の在ったところと伝えられ、また古文書文献によると、城谷城として築城され、天正14年(1586年)井手平城(桑木場薬王寺一帯の丘陵地)の攻防戦の際は、守備軍として大いに活躍した地所でもあるという、この山の北側一帯の部落を城の谷と呼ぶ。昔、城が所在したためこのように呼んだのであろう。

頂上に登れば、早岐の町や花高団地を眼下に見下ろし、遙か大村湾の彼方まで眺望が開ける、東に足を運べば苔むした小さな地の神の石祠があり、また西に足を運べば竜王様を祀ってある。

遠い昔から、早天続きの時はこの山に登って雨乞いをしていた所で山の名を天城山または雨乞山とも呼ぶ。

歌人として名高い、鎌倉幕府、3代将軍、源実朝の歌に「八大竜王雨止め給え」というのがあるが、水害でも起きるような大雨を降らせて下さいと、大早魘の度に、上原浄漸寺の住職法印、早岐神社の神主が祈禱を行ない、また、下苗手迎屋敷の大徳院大仙、丈伝の法師が、七色の吹き流しを、松上高く押し立て、法螺貝を吹き鳴らし、大祈願をした姿が、樹林の彼方に彷彿として浮かぶ。

地元古老の話によれば、昔は、胸付の急な坂をよじ登って、ささやかな地の神のお祀りをしたものだというが、今では山に登る人の姿も

稀で、小道すら判からぬまでに樹木が生い茂っている。

昭和60年1月

原稿提供 浦川 千勝

### 城の谷城跡

国道35号線から早苗町の台地が、後背の西の岳に続く平松登坂口の鞍部と連結する辺りを城の谷と呼ぶ、即ち、古刹浄漸寺の正面に当たり上原水田を挟む台地上に城の谷城は所在する。往昔より当城の所在したためにこの字を城の谷と呼んだのであろう。

### 構成

東西100メートル、南北に70メートルにも及ぶ平坦地を有する規模の整った中世山城である。東面、北面、南面は、自然の急峻な崖となり、西側尾根に拡く平坦地とを、堀切りによって遮断し、独立した男山的城塞を形成している。前方東南は、上原水田、早岐市街を一望し、田の浦越しに針尾島、早岐水道、大村湾の眺望が開け、更に東は二本松の小丘をまたいで、小森川流域の田原を眼下にし、井手平城塩投城、鷹の巣城を目睫の間にとらえる位置にある。

古書文献によると、広田と並ぶ早岐城或いは二本松金ヶ城とあり当城に相当すると推考される、早岐城は天正年間(1575年～)広田城と共に築城され、井手平城攻防の際は、守備軍として後藤惟明がこれによったと伝えられる。平戸軍方の後詰め城として、存在価値は大きい、後年、広田城に関する記事が主となり、早岐城については、文献が少ないため、忘れられた存在となったようである。

(佐世保考古学研究会)



## ＜参考書籍＞

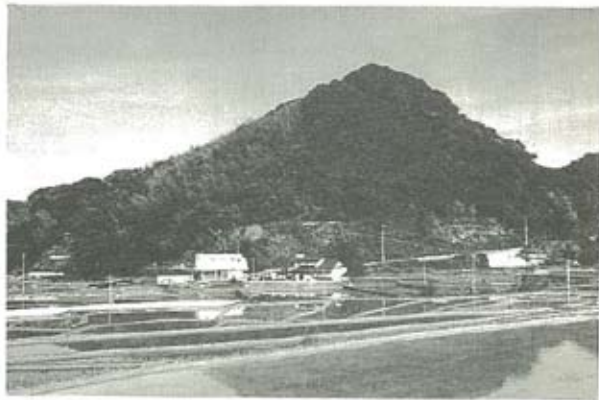
## 早岐郷土史概説 1994(平成6年)発行

大徳院の大仙、丈伝等の法師が七色の吹流しを空高く押立ててホラ貝を吹き鳴らし、三七、二十一日の大折願をした姿が樹木の彼方に髣髴する。

昔は、地元の古老の話を開けば胸つきの急坂をよじ登って、ささやかな地の神様のお祀をしたものだというが、今では山に登る人の姿もなく、小径すら判らぬ程に草が生い茂っている。

歌人として名高い三代將軍源実朝の歌に、「八大竜王雨やめ給え」という歌があるが、水害でも起こるような大雨を降らせて下さいと早岐神社の神主、或いはそれより以前は、浄漸寺の法印、終戦前頃は早岐郷土史

昔から雨乞いをしていた所の山の名を人々は天乞山、と呼び、また城山とも呼ぶ。山の北側は深い谷をなし、小字名を城の谷という。



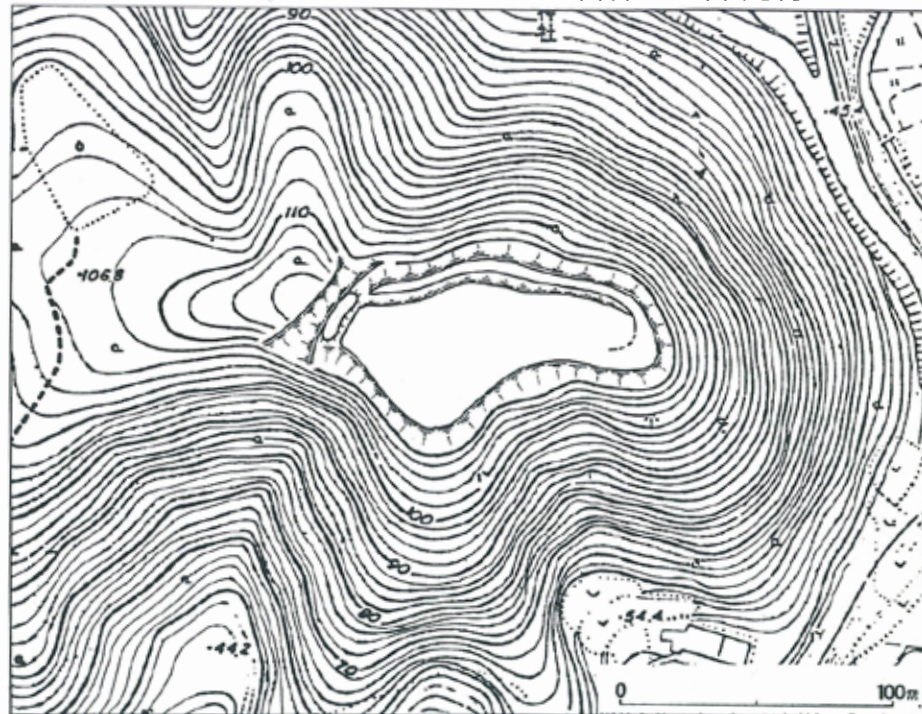
金ヶ崎城跡遠望

## 雨乞山と竜王祠

この金ヶ崎城の山は、この地方では普通、天乞山と呼ばれている。かつては松浦藩の物見番所があったと伝えられ、頂上からは早岐・広田の集落が一望の中に収まる。頂きの東側に足を運ぶと、苔むした小さな石祠があり、竜王様、或いは地の神様と呼んでいる。遠い山鹿敏紀氏によれば、金ヶ崎城という。井手平城攻防の折、後藤惟明が大村連合軍の一員として、ここに築城して立て籠もったといわれる。土塁・堀切・段築跡などが見られる。

## 宮地獄神社と金ヶ崎城址

## 中世山城分布調査報告書 1981(昭和56年)発行



第44図 金ヶ崎城

## 28 金ヶ崎城 (第42図No28) 標高 125 m

所在地	佐世保市上原町
創建者	後藤惟明?
形式	山城(土塁式山城)
遺構	土塁・堀切・段築
規模	東西 150m×50m 南北
文献	三光譜録
概略	

金ヶ崎城は井手平城攻防戦の時、後藤惟明が大村連合軍の一員として、この地に城を築き立籠ったとされる城跡で、この位置から広田城の展望はきくが、井手平城は前面に尾根があって見えない。創建期などに不明の点が多い。また、この城を早岐城とする説もあり、今後の調査を必要とする城跡である。



金ヶ崎遠景

みどころ 金ヶ崎城は土塁・堀切・堅堀・段築等があるが、全体的に見て臨時的な築城と思われる。遺構が貧弱な造りなのは、天然の要害と云う一因もあると思われる。城主である後藤惟明についても不明である。



## ＜金ヶ崎城(城谷城)の概略＞

場所という国道35号線平松入口交差点を平松方向へ450mほど登ると高速道路の手前に上原町公民館がある。

その背後にそびえる山が金ヶ崎城または城谷城とも呼ばれる山城跡である。

公民館を通過し上に登り、高速道路の高架をくぐった辺り一帯の谷の小字を「城谷」という、

他にも周辺には「鎧田」「姫乗」「馬責」などの小字があり、その昔に城が在ったことを偲ばせる。

城跡は現在の町名でいうと早苗町と上原町の町境に位置している。

## ＜3冊の参考資料にみる矛盾点＞

今回参考にした3冊のいずれの書籍にも後藤惟明の名が出てくるが、おおきな矛盾点がある。

「中世山城分布調査報告書」と「早岐郷土史概説」には「金ヶ崎城は後藤惟明が大村連合軍の一員として、この地に城を築き立て籠もった」としてある一方で「上原散歩1992」は、「平戸軍方の城として築かれた」としてあり、まったく敵味方逆のことが書いてあり、混乱を招いている。

しかし城の位置、後藤惟明の当時の状況を見て平戸方の城であったことは間違いのないと思われる。

後藤惟明という人物は元々平戸の松浦隆信の3男として生まれ、武雄の後藤家に養子に出されそこの跡目争いで破れ、平戸に帰ってくる。そして今の天神公園あたりに館を構え領主となる。白岳神社を建立したともいわれる人物であり。天神公園付近にあったその墓は、現在故郷の平戸に移されている。

また後藤惟明は広田城の戦いに参戦したとの記録もあり、大村軍の一員であったということは考えにくい。

したがって「早岐郷土史概説」はおそらく「中世山城分布調査報告書」を参考に書かれたものだと思うが「後藤惟明が大村連合軍の一員として」の記述は謝っていることになる。

## ＜まとめ＞

城谷城というのは、一般的には教育委員会が報告している「金ヶ崎城」のことで、地元の人の中には城谷城(城の谷城)と呼ぶ人もいる。

井手平城の戦いと関連性は、謝った記述がありはしたが、いずれの書籍にも後藤惟明が井手平城の戦いの際、この城に詰めたと記述されており、井手平城落城の際に何かしらの動きがあった可能性は大きい。

例えば、井手平城の落城を確認するやいなや、いち早く平戸への援軍要請の船を早岐瀬戸あたりから出したのか、もしくは広田城へ落城の報告をしたのち平戸へ使いの船をだしたのか、それとも当時の連絡手段として用いられていたとされる狼煙(のろし)によって広田城へ報告、そこから平戸へ、狼煙の連携により報告されたのか、いずれにせよ、井手平城落城の数日後、勢いに乗った連合軍が広田城を攻めている最中に、報告を受けた平戸軍の軍船が駆けつけ、連合軍を撃破している。

この城に関して、各誌共通していえることは創建期など不明な点が多いということがある。後藤惟明が連合軍の侵攻に備えてその時期に築城したとの説もあるがはっきりとはしていない。

佐世保の戦国期最後の戦いとなった井手平城と広田城の戦いを考察するうえで大変重要な城であり、今後の調査を必要とする城跡である。



麓にある宮地嶽神社



小字にある城谷の集落